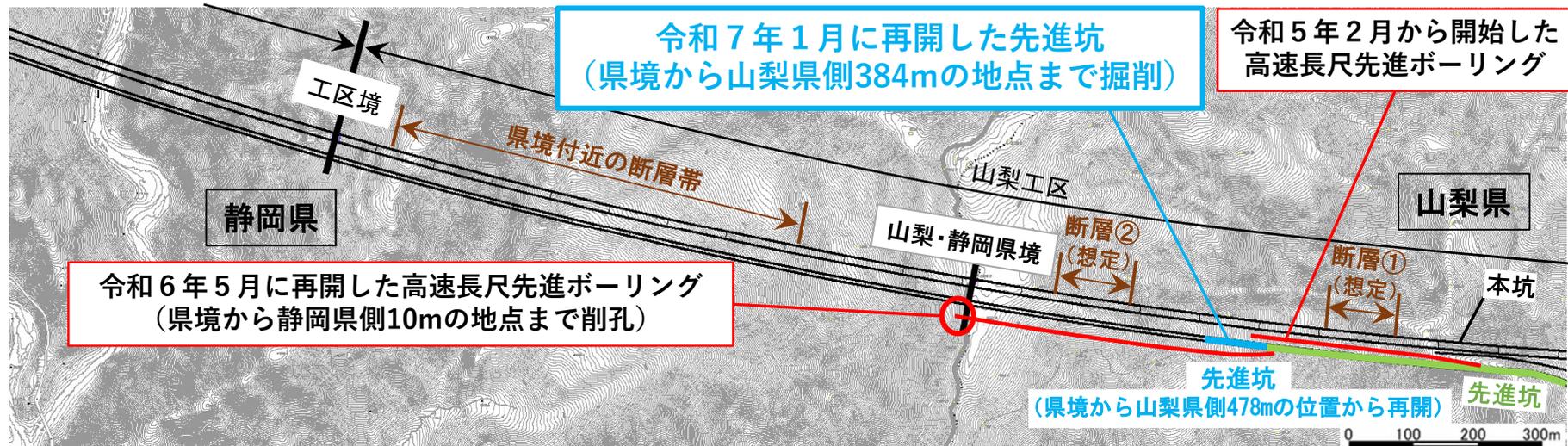


# 山梨・静岡県境付近の先進坑の掘削状況

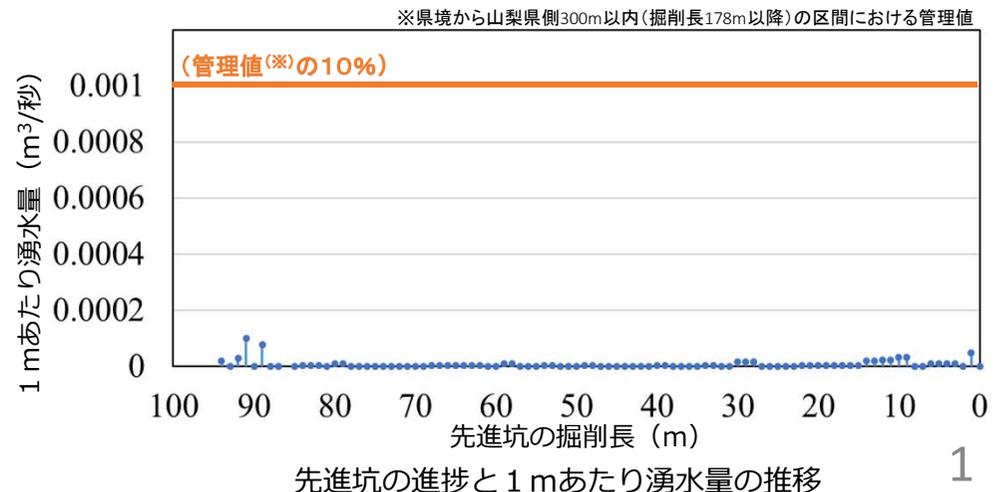
- 令和6年5月に再開した高速長尺先進ボーリング調査は、孔口から511m(県境から静岡県側10mの地点)まで削孔し、一旦終了。その後、令和7年1月8日以降、先進坑掘削を再開し、地質及び湧水の更なる確認を進めている。
- 3月22日時点で、県境から山梨県側384m(再開位置から94m)まで掘削しており、1mあたり湧水量は、最大0.0001m<sup>3</sup>/秒(0.1L/秒)と少ない状況。



## (参考) 先進坑の湧水量の管理値との比較

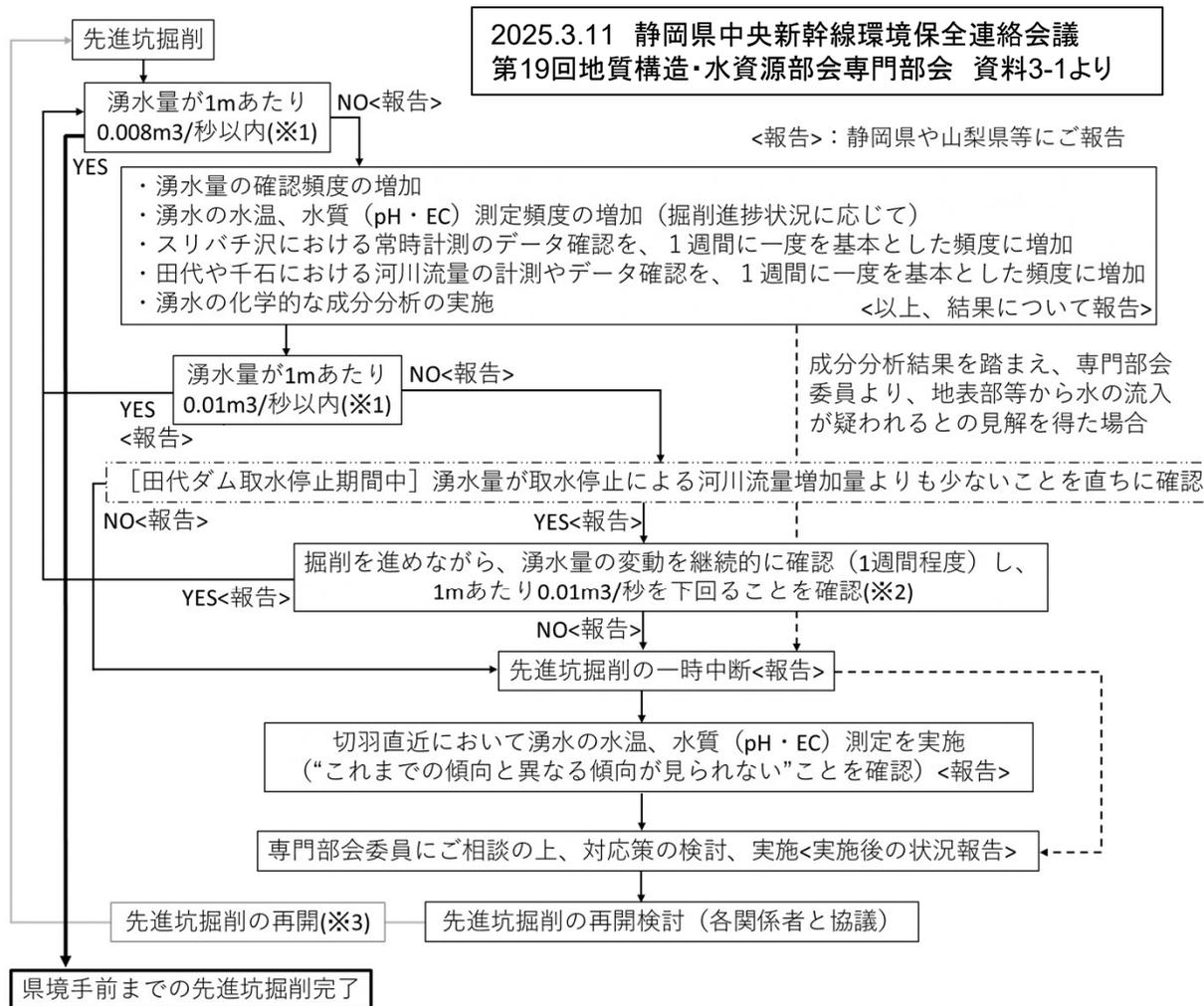
- ・先進坑の県境から山梨県側300m以内(掘削長178m以降)の区間における管理値である「1mあたり0.0001m<sup>3</sup>/秒(0.1L/秒)」と比較したところ、最大で1.0%と、非常に小さい状況が続いている。

高速長尺先進ボーリングにおける10mあたり湧水量は最大0.00066m<sup>3</sup>/秒(0.66L/秒)程度で、高速長尺先進ボーリングの管理値である10mあたり0.05m<sup>3</sup>/秒(50L/秒)と比べて、非常に小さい(最大で管理値の約1.32%)



# 県境から山梨県側300m以内の先進坑掘削に関するリスク管理

## 管理フロー



※1：掘削進捗に対する湧水量の“増分”

※2：湧水が多い箇所でも長期間切羽を止めることは安全上望ましくないため、地質が安定した箇所まで掘削を継続しつつ1週間程度湧水の状況を確認することを意図します。

※3：1mあたり0.01m<sup>3</sup>/秒超過箇所の湧水発生等状況は継続的に確認

## 管理項目

- 掘削中は切羽後方の湧水量を常時計測し、湧水の水温、水質(pH、EC)を、1日に一度を基本とした頻度で計測。
- 水資源・生態系へのご懸念に配慮し、静岡県内で断層帯に関連するスリバチ沢における流量、伝付峠付近に存在する湧水、また田代観測井の水位の常時計測を実施。
- 河川流量について、田代ダム下流で1カ月に一度を基本とした計測、千石で1カ月に一度を基本とする頻度で常時計測のデータ確認を実施。

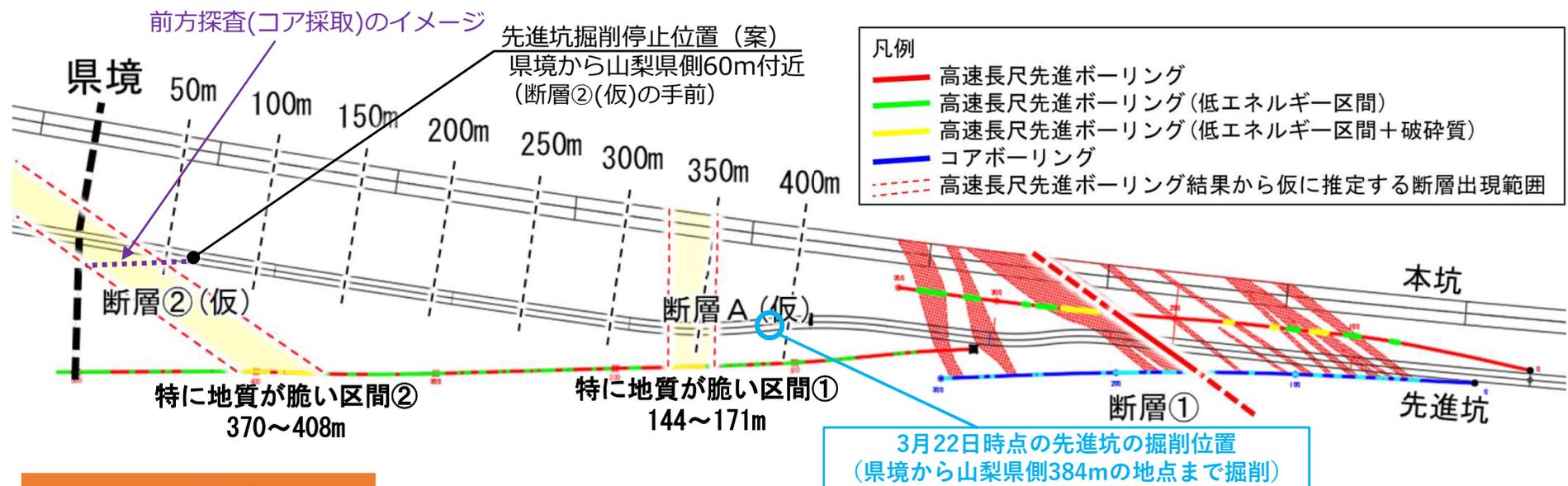
## 報告の項目、方法、頻度

- 湧水量、水温、水質の計測結果を1週間に一度を基本として、静岡県や山梨県等に報告するほか、湧水量、水質に関する何らかの異常等が見られた場合は速報。
- 極めて破碎質の地質が見られた場合は、整理次第報告。「湧水量が1mあたり0.008m<sup>3</sup>/秒（8L/秒）を超える場合」等は頻度を上げて日毎に報告。
- スリバチ沢、伝付峠付近の湧水、田代観測井におけるデータは、確認の都度速やかに静岡県に結果を報告。

# 県境手前の先進坑の掘削停止位置とその後の調査計画

## 先進坑の掘削停止位置

- ・ 静岡県内からの湧水流出を防ぐことを目的として、掘削停止位置は県境から一定の離隔を確保。
- ・ 地表踏査やボーリング調査における掘削エネルギーの情報等から推定した断層（想定）とトンネルの位置関係から、断層②（仮）は県境から山梨県側50mの地点より手前で出現の可能性があることも踏まえ、念のためさらに山梨県側に離隔を確保し、『県境から山梨県側60m付近』で一旦停止。
- ・ その後、前方探査（コア採取）を行い、地質や湧水の状況によってはさらに前方に掘削を進めるほか、これまでに得られた湧水の調査結果等からも、県境から確保すべき離隔を検討。



## その後の調査計画

- ・ 先進坑を進めて県境手前で停止した後は、先進坑より、県境を越えて高速長尺先進ボーリング(\*)を実施。

※県境付近より実施する高速長尺先進ボーリングの調査中のリスク管理については、第4回、第5回モニタリング会議でご説明した、前回ボーリングにおける『慎重に管理する県境に近い区間』で実施してきたリスク管理の内容と同等とすることを基本